

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 埜 幸 枝 |
| 学位の種類 | 博 士（学術） |
| 学位記番号 | 甲 第 203号 |
| 学位授与年月日 | 2018年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 学位論文題目 | 障害者表象をめぐる視線の変遷 ——メディアにおける障害者と笑いの関係に注目して—— The Transition of the Gaze: The Representation of the Relationship between Disabled People and Laughter in the Media |
| 論文審査委員 | 主 査 教 授 池 田 理 知 子 副 査 教 授 田 仲 康 博 副 査 教 授 カレン, ベヴァリー F. M. |

論文内容の要旨 Summary of the Dissertation

埜幸枝氏の博士論文は、障害者表象と障害者に対する認識がどのように相互に関連しているのかを通時的および共時的に明らかにしようとするもので、日本語で執筆されている。

本論文では、障害者表象と認識の相互関係を解き明かす手がかりとして「笑い」に焦点を当てている。また、笑いという極めて社会的な事象を通して、メディアと社会の連動性を明らかにするという課題にも取り組んでいる。

具体的には次の四つの課題を設定し、分析・考察を行っている。

1) 障害の概念が通時的にどのように変化してきたのかの検証を通して、障害とは何を意味しているのかをあぶりだすことが第一の課題として提示されている。まず、障害の概念がそれをインペアメントとして捉えるもの（障害の医学モデル）から、障害者を取り巻く社会的環境の問題として理解しようとするもの（傷害の社会モデル）へと変化したこと、したがって障害が社会的に生み出されたものであることが確認される。そのうえで、障害者との「共生」が語られるようになった昨今の状況を批判的に分析する。そこで明らかになったのが、障害者と健常者が「わかり合える」ことを目指し、そのための表層的な「コミュニケーション」の重要性が唱えられている「共生」概念のなかに

潜む暴力性、つまり社会が障害者を理解可能なものとして一方的に位置づけていることであった。

2) 第二の課題は、メディアにおける障害者表象の変遷をたどっていくなかで、障害者へのまなざしがどのように変化したのか／していないのかを明らかにすることである。視覚メディアの基本的な役割と、そこで描かれる障害者表象をめぐる力学が読み解かれる。結局、写真や映画、テレビといったさまざまなメディアで表象される障害者像には媒体による差が認められるものの、ステレオタイプな障害者への見方が常に存在することがメディア間の共通の問題としてあることが確認された。

3) 第三の課題は、笑いの社会的機能を踏まえつつ、障害者と笑いの関係、つまり障害者にとって笑いという営為がどのような意味をもちうるのかを解き明かすことである。さまざまな笑いに関する理論を整理したうえで、障害者が笑いの対象であった時代から、笑ってはいけない存在、あるいは笑いのオーディエンスへと変化し、さらには笑いのパフォーマーとしての姿が散見される現在へと変化していったことが多様な事例をとおして示される。

4) 第三の課題で明らかになった笑いのパフォーマーとしての障害者の姿から見えてくるものは何か、笑いと障害者との新たな関係から浮上してきた身体・行為・コミュニケーションの問題とは何かを考察するのが、第四の課題である。NHKの福祉番組である『バリバラ』の分析を通して明らかになったのは、社会に蔓延する「よきコミュニケーション」とされているやり取りがなされている姿であった。当該番組が障害者のこれまでとは異なる表象を試みており、オルタナティブな視点を提示していることは確かであるが、「障害者に対するよきコミュニケーション」や「テレビ表象におけるよきコミュニケーション」が想定されている構図そのものを崩すことができないこと、それがメディアと社会の連動性を照射していることが指摘される。

本論文の目次は以下のとおりである。序章から始まり、第一章「障害者をめぐる視線の変遷」、第二章「視覚メディアにおける障害者表象」、第三章「障害者と笑いの関係」、第四章「『バリバラ』が提起する笑いの意味」、第五章「障害者パフォーマンスと身体・行為・コミュニケーション」、そして終章となる。

論文審査結果の要旨 Summary of the Dissertation Evaluation

(1) 塙幸枝氏の学位論文の審査は、2018年1月31日(水)の15時に始まり、16時に終了した。審査された場所はERB II 301号室であった。論文審査委員会は、専門分野が異なりつつも相互補完性をもつ3名の教員で構成されていた。コミュニケーションと権力の問題に主眼をおき、私たちが何を語らせられているのかを具体的な文脈のなかで明らかにしようとする研究に従事している池田理知子教授が主査を務めた。そしてメディアと権力の関係を批判的に読み解くこと、そこにどのような政治性が潜んでいるのかを解き明かすという研究をしている田仲康博教授と、多角的な視点でかつメディア横断的な観点から翻訳について研究しているカレン教授の二人が審査委員として論文の審査に加わった。

塙氏の博士論文中間審査は、2017年10月11日(水)にERB II 204号室で11時半から12時40分まで行われた。そのときに3名の審査委員から指摘された点を踏まえて改稿し、今回の最終審査に臨んだのだった。

(2) はじめに主査の池田委員から本論文の要約の要請があり、塙氏がそれに応じて簡潔に論文の趣旨と要約が述べられた。これまであまり省みられることがなく、かつ研究としてもそれほど進んでいるとは言い難い障害者と笑いというテーマの独創性と、そのことを分析することがメディアと社会との関係を読み解くうえで重要な意味をもつことがそこでは強調された。

次に田仲委員から、今回の障害者へのまなざしと笑いの関係を分析の俎上へのせ、それを最終的にコミュニケーションの問題へとつないでいったところが非常に興味深かったという感想が述べられた。そして博士論文としては今回提出された論文にはまったく問題がないことを伝えたうえで、今後の課題につながる次のような指摘がなされた。メディアと社会の問題を考えるのであれば、社会とは何かを考察する必要があり、それは具体的には「公共性」とは何かを視野にいれたうえで、ますますあいまいになりつつある公と私の区別のなかで障害者がどのようにまなざされているかを考え、そこにどのようにメディアが絡んでくるのかを解き明かしていくことが必要になるということであった。塙氏からは、今後の課題としたいとの返答があった。

カレン委員からは、論文の評価としては田仲委員と同じで高い評価をしていることがまず述べられた。次に、今後の研究の方向性に関する次のような質問がなされた。質問の内容を要約すると、今回の分析の中心はテレビであったが、今後は他のメディア、特にインターネットでの障害者表象の問題にも踏み込んでいくつもりはあるのか、という

ものであった。埴氏からは、ネット上のロール・プレーイング・ゲームで自閉症の子どもがまったく別の自分を演じる姿が報告されているが、それが何を意味しているのかに、現在興味があることが語られた。表象されるだけの存在から、障害者自身が自らのイメージを作り上げていく存在となりうるのかという次の研究課題が提示されたことになる。

主査の池田委員からはまず、論文自体は非常に完成度が高く、深い考察のもとに書かれたものであるとの評価がなされた。そのあとで、今後の課題として考えなければならない次のような問題が指摘された。それは、オルタナティブな視点を提示する番組であってもそれを見ないという選択をする人が圧倒的に多いとすると、障害者と社会の関係があまり変化していかない可能性が高いのではないか、変化するためにはどういったメディアの形式と内容が求められるのかというものであった。埴氏からは、今後の課題として考えていきたいとの応答があった。

その後、3人の委員からこの論文を書籍化するようにとの要望が伝えられた。埴氏もそのつもりであるとのことだった。またそれと同時に、書籍化するにあたり『バリバラ』に出演している障害者の「芸人」の名前をどう扱うかが議論となった。当該論文においては公的な人びととして本名を出してもかまわないだろうが、書籍になる場合はNHKと出版社の間での話し合いになるのではないかという結論に至った。

またカレン委員からは、ぜひ英語での書籍化も考えてほしいという意見が出された。埴氏からは難しいとの返答だったが、カレン委員から英語の論文として一部を出版することは可能なはずだから、ぜひやってほしいという要望が伝えられた。

(3) 論文審査口述試験の後、引き続き審査委員会を行った。当該委員全員が、誤字脱字のみの修正で、その他の修正は必要ないとのことで意見が一致した。そして当該委員会は、本論文が博士論文に値する研究であること、メディア研究やコミュニケーション学といったアカデミズムにおいて非常に優れた研究であるのみならず、一般社会への訴求力も持ち合わせた内容であることを確認し、博士論文審査に合格であると判断した。

| | | |
|-------------------------|--|---------------------------------|
| Name | BAN Yukie | |
| Degree Type | Doctor of Philosophy | |
| Degree Number | 20X | |
| Date Degree Awarded | 23 March 2018 | |
| Requirements for Degree | See Part 4 Paragraph 1 on degrees | |
| Dissertation title | The Transition of the Gaze: The Representation of the Relationship between Disabled People and Laughter in the Media | |
| Dissertation Evaluation | Chief Examiner | Professor IKEDA Richiko |
| Committee Members | Second Examiner | Professor TANAKA Yasuhiro |
| | Third Examiner | Professor CURRAN, Beverley F.M. |

論文内容の要旨 Summary of the Dissertation

Ms. Yukie Ban’s doctoral dissertation is intended to clarify the relationship between the media representation of disabled people and how the disabled are perceived. The dissertation was submitted in Japanese. The focus of this thesis is the representation of disabled people and the recognition of a reciprocal relationship in terms of laughter. Further, through the very social event of laughter, the issue of the connection between media and society can be clarified.

Specifically, the following four subjects are introduced, analyzed and considered:

1) Through the verification of how the concept of ‘disability’ has changed over time, the friction created by different meanings of disability will be presented. First, the idea of disability as impairment will be considered (the medical model of disability) and then how it shifted to understanding the disabled person within the social environment (the social model of [illness](#)) in order to clarify that disability is a social invention. In addition, the recent discussion of “coexistence” with the disabled is subjected to critical analysis. What becomes clear when we

look at the importance of superficial “communication” in order for disabled and able-bodied “understanding each other” to the concept of coexistence, is the presence of violence lurking within that concept; that is, that society is able to unilaterally position the disabled person as comprehensible.

2) The second topic of whether or not there is a change in the gaze directed at disabled persons is clarified in the process of examining the changes in the media representation of disabled persons. The basic role of visual media and the dynamics surrounding the description of representations of disabled persons are scrutinized. Finally, while acknowledging differences dependent on the medium itself, the stereotypical gaze directed towards disabled persons in photographs, films, television and other media was confirmed as a common problem.

3) The third issue is to understand the relationship between disabled persons and laughter by taking the social function of laughter into consideration. In short, what kinds of meanings have for the disabled, and how it operates will be understood. In addition to the examination of various theories of laughter, the age of laughing at the disabled person to the current state of laughter not being allowed. In short, it traces the shifts in the audience and the figure of the performer of laughter through diverse cases.

4) What becomes apparent from the figure of the disabled person’s performance of laughter, which was clarified in the aforementioned third topic, is the emergence of a new relationship in the problem of the body/action/communication. The fourth topic under consideration is the nature of that new relationship. Through the analysis of NHK’s social welfare programme *Baribara*, what will be clarified is the socially prevalent form that “yoki communication” has taken. Certainly the programme is trying different representations of disabled people and presenting alternative viewpoints, but it is unable to break down assumptions regarding the composition of “good communication with disabled persons” and “good communication in television representation,” foregrounding and shedding light on the linkage between media and society.

The table of contents of this thesis follows. To begin there is the Foreword, and then the thesis proceeds through Chapter One “Transitions in the gaze directed at disabled persons”; Chapter Two “Representations of Disabled Persons in Visual Media”; Chapter Three “The Relationship between Disabled Persons and Laughter”; Chapter Four “The Meanings of Laughter raised in *Bari Bara*”; and Chapter Five “Disabled Persons’ Performance and body/act/communication.” These five chapters are followed by the Conclusion.

論文審査結果の要旨 Summary of the Dissertation Evaluation

(1) The examination of Ms. Yukie Ban's dissertation was held on Wednesday, 31 January 2018, beginning at 1500 and concluding an hour later at 1600. The site of the examination was ERB II-301. The thesis examination committee consisted of three professors from different but complementary areas of specialization. The research of the chief examiner Professor Richiko Ikeda focuses on the subject of communication and power, so she was clear on the specific context of the study; Professor Yasuhiro Tanaka, whose work is the critical understanding of the relationship between media and power and its implicit politics, and Professor Curran, to bring her multilateral and intermedial perspective from translation studies, were added as the two supporting members of the Dissertation Examination Committee.

Ms. Ban's mid-term dissertation examination was held on Wednesday, 11 October 2017 in ERB II-204 from 1100-1200. Based on points taken by the three committee members at that examination, it was decided that this time would be the final examination.

(2) To begin, Professor Richiko Ikeda, the Chief Examiner, requested a summary and Ms. Ban did so accordingly. The sensitive topic of laughter and disabled persons has been largely overlooked and the originality of this research, as well as the significance of the analysis to understand its relationship to media and society, was emphasized.

Professor Tanaka, a supporting committee member, felt that the analysis of the relationship of laughter and the gaze directed at disabled persons and ultimately the problem of communication was very interesting. At this stage, the dissertation had no problems so his remarks were directed towards future research. When thinking about the issues of media and society, it is necessary to think about the nature of society itself. More specifically, what is its "public nature" and how is the media involved in the increasingly vague demarcation between the public and private gaze directed at disabled persons? Ms. Ban replied that this is a topic that she would like to pursue in further research.

Professor Curran, the other supporting member of the committee, shared Professor Tanaka's high evaluation of the dissertation. Next, she had a question regarding the direction of future research. To summarize the question, after a remark regarding the focus of the analysis on television in the thesis, it was asked whether there was interest in moving into research on the representation of disabled persons in other media, particularly the Internet. Ms. Ban replied that it was reported that autistic children have totally different avatars when playing online role-playing games and she is currently interested in looking into what was said. The next

research topic will be concerned with showing how, instead of only being represented by others, the disabled person creates their own image to represent themselves.

The Chief Examiner's evaluation of the thesis was that it was a well-written and deeply considered consideration of its subject. Although there are television programmes that show an alternative view, the overwhelming number who choose not to watch means that there is a high possibility that the relationship between disabled persons and society will change very little, but in order to change, what changes to media format and content are required? Ms. Ban responded that this is a future topic that she would like to think about.

After this, the three members of the committee expressed the desire to see this dissertation become a published work. Ms. Ban also has this intention. At the same time, there was discussion about how to deal with the names of the disabled persons who are 'performers' on *Bari Bara*. Although there is no issue with their real names appearing in the dissertation, in the case of a published work, it was concluded that there would probably need to be discussions between NHK and the publisher.

Professor Curran also expressed her opinion that Ms. Ban should think about publishing her work in English. Although Ms. Ban replied that it would be difficult, Professor Curran said that it would be possible to publish parts of the dissertation as journal articles, and that she hoped this would be done.

(3) After the oral examination, the meeting of the committee members continued. All members agreed that aside from typographical errors, there was no need for revision. Furthermore, they agreed that not only was this doctoral dissertation outstanding as an academic work in the area of media and communication, but that its contents would appeal to the general public, and for these reasons, it was confirmed that it passed the dissertation examination.